
大地の不死鳥

大地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大地の不死鳥

【NZコード】

N8035Y

【作者名】

大地

【あらすじ】

ある日、大地は不思議な鳥を目撃する。それから、大地は……。
極めてRPGに近いシナリオです。

第1章 プロローグ（前書き）

この話はフィクションです。

第1章 プロローグ

夜、大地は目が覚めた。

外を夜の冷たい風が吹き抜けていき、家の中にいた大地もその冷たさを肌に感じていた。右に目線を移せば、質素としか言えないこの部屋の中心にいる自分を映す一際目立つ鏡がある。自分の正面に構える窓からは、常に月明かりが入ってくる。ふと、それが目に留まり、窓の方へ近づいていく大地にも月の光が降り注がれた。木の枠付けがさせた窓から外を眺めると、そこには満天の星空が広がっていた。星々は煌々と輝き、そこに月の光が合わさり、地上に降り注いでいる。その星の1つ1つが宇宙の神秘と輝きを改めて思い知らされる定物の1つでもあった。その輝きに大地はちょっとした感動を抱いていた。

気づいた時には、大地は星空を美しく舞う不思議な鳥を見ていた。大いなる深紅の翼をばたかせ、瑠璃色の尾を引いて居るように見えるが、具体的な色はハツキリ言つて分からない。体中からまるで無数の螢のような光を振りまいて飛ぶその姿は、夜空の星々より目立ち、大地の目に焼き付かせた。

何だ!? あの鳥は……、とそればかり考えていた。もつとあの鳥を見よう、と言う考えが頭に浮かび、窓から身を乗り出したのは失敗だったようだ。大地の勢い余つて下へ落ちてしまつた。天と地が逆になり、また戻つた頃に大地は地面に落ちたの実感した。その一瞬の間にも、大地の目にあの鳥は映つていた。

「うわっ！」

何だかいつも以上に甲高い声が出た。 運良く家の下は砂だつたため大地は無事であつたが、そんなことを考える暇もなく、大地の体制と立て直し、鳥がいた方を見たが、鳥は姿を消していた……。

「一体、何だつたんだろう？」

大地の住む島には、数多くの魔物が生息しているが、あんな鳥は

見たことがない。外の世界を知らない大地が見たことがないというのは確かに言えることだった。あんな鳥が存在して居るのか、と言う感動を裏に大地の謎は深まるばかりであつたが、そんなことを考える想像力をあまり発揮しない大地はそのまま眠気の覚めない眼をこすりながら「どうでも良いや」という表情を浮かべ、家へと続く階段を上つた。強い風が吹き抜け、大地の帯は大きくはためき、同時に大地は一つ大きな欠伸をした。

大地は家に入り、眠りについた。

窓から差し込む日の光で大地は目が覚めた。いきなり起き上がりつた大地は背伸びをすると、周りを見渡した。特に何の異常もないようだ、と思い、何故か安心する。清々しい日の光が大地に朝だということを伝えている。昨日の夜のことを考えると、より眠気が舞い戻つてくるような気がしてしそうがなかつた。大地は眠気が残る中、目をこすりながら立ち上がり、着替えを済ませると、外へ出た。

潮の香りが鼻に伝わる。大地の目の前には、青い海が遙か彼方まで広がつている。何気に青が好きな大地の取つてみれば、一番心地の良い場所であつた。そうだ、家の前は海だつたんだ、と改めて思い直すと、大地は海へ向かつていつた。

輝く白い砂とコバルトブルーの海。この白と青の境界線上に今、大地は立つている。波が押し寄せるギリギリ立つと、水平線上を目線が走る。どこまで続いているのだろう……、と思える。しばらくは、大地もそこら辺に落ちていた木の枝で砂浜に絵を描いていたり、偶に遠くで小さく跳ねる魚を眺めたりしていたが、それはあまりにも短い時間に過ぎなかつた。時折、目にする白浜に移る海水の満ちた後。初めて海水が足に浸かつたことを感じながら、大地はゆつくりと座り込んだ。穏やかな時間が過ぎていく……友達の大洋の元へ遊びに行こうか、（いや、もう遊ぶことがない……）村の外で魔物を討伐でもするか、（いや、弱い奴ばかりしかいないから飽きた）……。大地は大きなため息を吐き、独り言を呟く。

「はあ、暇だなあ」

大地は、この頃暇が続いている。**憂鬱**というか、人生に面白味がないというか、とにかくこの暇に満ち溢れた生活から抜け出したかった。面白いことがあれば良い。唯それだけ……。

何することがなかつた大地は家に入った。寝転がり、立ち上がり、寝転がり、立ち上がり……を繰り返していたが、途端に何かを考え始めた。そんな時、窓からささやかな風が吹き込んでくる。大地は風を吹き先を目で追つてみると、部屋の片隅のたんすの下に何かあるのを見つけた。見つけたというよりも思い出したのだ。

（確か、たんすの下には……）

咄嗟に行動に出る。特に何も入つていらないこのたんすは子供の大地でも普通に動かせる大きさであったが、壁にピッタリついてしまつていてこのたんすは押すのではなく、引かなければ行けないので、比較的押すより大変な作業だ。そんな苦労も考えながら、普通にたんすを押し退けると、そこには地下階段があつた。年に一度入るか入らないかぐらいの階段。殊に違和感がある訳でもなく、中にも殊に何もないから、こういう暇な時にしか入らないのだ。

その条件道理、特に何もすることが見つからなかつた大地は頭の中に好奇心もなく、とりあえず、と言つ気持ちで入つてみると、した。床扉を開けた大地の鼻に妙な埃臭さが伝わる。思わず、「ゴホツ」と一つ大きな席をすると、手を振つて埃を払う仕草をする。毎回、入るときはこの臭いを体験しているので、慣れていたもののそれでもきついものだ。大地の表情が少し歪んだ。

地下に入ると、階段が闇の中へ続いていた。大地はその階段を忍び足で下りていく。微々だが、階段がきしんでいるように思えるが、毎回そんなことは体験しているため大地にそんなことは氣にも入らなかつた。

しばらく下りると、地下室に着いた。冷凍室のように冷たいこの部屋は暑い今の時期には最高の部屋であつた。大地は電灯を点け、

部屋全体を見渡す。何も入っていない樽^{たる}が数個あるだけ……。いつもと同じ光景……。

また、大きなため息を吐いた大地は、何となく樽の1つに腰かける。その時 大地の体重が重くなつていたらしい……。樽はつぶれ、大地は後方へ倒れた。

「うわっ！」

昨日より低い声だつたが、同じ「うわっ！」に変わりはない。思ひがけなく後方には、壁があつた 大地は頭を打ち付けてしまつた。相当大きな音と振動がしたように感じ、痛みが後頭部を襲う。そんな中、ふと、あることに気付く。今、ぶつかつたとき、壁に変な違和感があつた。大地の直感はよく当たる。自分でも大体確信はつく。痛む後頭部を押さえながら、ぶつかつた辺りをそつと触った。考えるよりも先に大地は壁を思いつきり押していた。（予想的中！）壁はズンと奥へ凹み、まるでスイッチが入つたような音が鳴り響いた。大地の後方ではもう壁が開き始めている。「こんなところに隠し扉があつたのか！」と目を丸くして見つめる大地も今まで気づかなかつた大発見に胸を膨らませる。何よりもこの退屈な生活に飽き飽きしていたこの時に起きた幸運的な出来事に興奮が治まらなかつた。恐る恐る中へ入つた大地は異常な快感を覚えた。今までとは違う空気が流れ込み、まるで別世界に入ったかのような……。永遠に閉まりっぱなしになるところだつた扉を開けたのだから、それもそのはず。

「何だ？ この部屋……」

周りを気の枠で囲つただけのようなとても質素な部屋。矛盾のごとく目の前には少々豪華な石の台があり、その上に何か不思議な絵柄の巻物が置いてある。異様な気配が感ずられる訳でもないが、何か書いてあるのか全く見当もつかない。その巻物を静かに手に取つた。触つても極普通の巻物。開いてみたい気持ちが抑えられず、大地は巻物の紐^{ひも}を手で解いた。そして、巻物の中身を目を細めてよく見てみると、驚くべきことに気付いてしまつた。大地は再度目を

丸くした。

まさかの……宝の地図だった。

さりに、

……宝の隠し場所は自分の家の裏手にある森だった。

「ようやくこの退屈な生活から抜け出せる……」

そう言った後は驚きのあまり、言葉が出なかつた。周りを見渡し、無言で部屋を出て、階段を上り、無言のまま元の部屋に戻つてきた。大地の興奮は頂点に達しかけていた。家の外へ飛び出す。海の囂きしか聞こえない静まり返るこの空間中で大地は大声を出した。

「よっしゃー！」

また家に入つたかと思うと、棚をゴソゴソ探し始め、瞬時に奥の方から懐中電灯を引つ張り出すと、大急ぎで裏の森へ向かつた。

第1章 プロローグ（後書き） (あき)

ネタばらし
・特に無し

家の周りを囲んでいる700mほどの木の柵も軽々と飛び越えると、そこには無限に広がっているの出ないだろうか、と思えるほど広大な森が広がっている。森の総面積は大地は所属している村の何倍にもなる。この方だいなもりを突き進んでいかなければならない。そう考へると、大地のやる気は一気に失せた。地図に書かれていたとしても、かなり時間がかかりそうだったが、大地はさつきとは気持ちを入れ替えたのか、どんなに時間がかかってもお宝が欲しい、と改めて心に固い決心を胸に進み始める。

森の中は、樹の香りで充満している。周りは深緑一色。動物は全くいないので、いつも安心して入っていくことができる。大地は森に入るたびに気持ちが落ち着くのだ。さつきまでの興奮も心の片隅に飛んで行ってしまっている。大地は歩きながら、大きく深呼吸するも、地図の中心に描かれている×を眺めた。ここが目的地だ、そう指さしながら思い、さらに奥へと足を踏み入れていった。

途中 程よい霧が周りに広がっていくのを見た大地はある気配を感じた。

「来た！」 そう言って、大地は笑みを作った。

『聖樹』

広大な森の中、唯一霧の吹き出るこの地帯で大地の目の前に姿を露にした大きな巨木。波には、日光が当たり続け、その反射で周囲にまで行き届かせる。色はどちらかと言うと、黄色に近いかもしれない。それはいわゆる村を見守る母なる樹だ。この木から放たれる胞子は魔物たちを寄せ付けない。その1粒1粒に魔力が宿つており、魔物たちに害を与えるのだ。こんな神々しく輝く樹が存在することは田能村の者から見れば、想像もつかないことだが、この村の者ならではの幼い頃から見てきている真実だった。大地は聖樹に村の平和を祈願すると、また先へ進み始めた。

どれぐらい時間が経つただろうか。それほど時間はかからなかつたように思えてしようがなかつたがとりあえず、目的地に着いているのは確かだつた。大地のやや優れた直感と地図上にある森の全体図の位置的にここであることは間違いない。近くにも、海へと続く下流の川の轟々とした激しい音が聞こえてくる。ちょっと探せば出てくるものだつた。大地は樂々と宝の隠し場所を見つけてしまつていたのだ。

地図には、

×で石板の釦を押せ

すれば 宝への道 開かれるだろう

と書いてある。

そこにあつたのは、苔に塗れ、ひどく染み付いている石板があり、そこに同じような灰色の釦がついている。推測では、ボタンがどこにあるのか分からなくする策略だらう。内心、（これ、バレバレ）と思い、お見通し、と調子の意を持ちながら静かにボタンを押した。大きな音がするのか心配だつたが、意外に音は小さく他の者に気付かれていなか、と言う不安が打ち消せる感覚。石板は静かに横に動き、やがて階段が現れた。大地は石板が動き終わるのを見届けると、1歩踏み出した。

中へ足を踏み入れると、まず持つてきた懐中電灯を点けようとしたのだが、その必要はなかつた。静かに奥の闇の中へ光が灯ついく。壁に均一された間隔で取り付けられている蛍光灯のような光を放つランプ。不気味なものだ。入つた瞬間に火が灯るとは。その後、階段と言う物はこんなに長いのか、と実感をもたらされた。相当長い階段がどこまでも闇の奥不快へ続いている。もしかしたら、永遠に続くかもしけない、と思えるほどだつた。後ろを振り向くたびにあの遠ざかっていく入口のせいと後戻りしたくなる気持ちを、宝が欲しい気持ちで押し殺し、前へと歩き続けた。

光が見える。どうやら、永遠の階段ではなかつたようだ、と大地

は安心の笑みを浮かべた。前方の青白い光が近づいてくる。そこには近づくにつれ、大地の気持ちは徐々に高鳴つていく。つい、1段飛びで階段を下り、駆け出す。

「着いたあ！」

思えず、口から出た言葉が壁にこだまして帰つてくる。部屋は思つた以上に広く、表面は青銅のような物質で作られており、そのせいで青白い光を放つっていたのだ。部屋の角のは、悍ましい表情を浮かべた。“オーガ”がこちらを睨み付けている。もちろん、作り物。ここにも、盗人を近寄らせないための工夫が施してあるらしい。一瞬驚いたものの、それにしてもよくできていると感心しながら、大地は部屋の中心に目をやつた。部屋の中心には青銅よりいい質の大理石で模られた台があり、その上に壺らしきものが飾つてあつた。周りをぐるりと回つて見てみても、特徴と言つ物は見当たらず、普通に店に売つていそうな壺にしか見えなかつた。それを見た大地は思わず言つた。

「これが宝？」

大理石には埃がかかつてゐる。よつぽど昔から置いてあつたのだろう、と思いながら大地は埃を掃い、おまけに自分の息で埃を掃つた。その大地の目にあるものが映つた。大理石に何か描かれている。人だろうか、魔物も描かれているような氣もする。人々は武器を手に持ち、魔物たちとぶつかり合つてゐるような風景を大地は頭の中で想像した。

「この壺を作つた人たちかも知れない。でも、これは何の絵？」

大地は軽くうなずいた。昔、この辺りで人間と魔物との戦争が起きて、その時に何かのきっかけで作られた壺なのかもしれないと思はえた。それは別として、大地は壺を手に取ろうとしたその時

ふと、あることを考えた。

（トラップがあるんじゃないかな？）

持ち上げた瞬間に槍でも飛んでくるのではないだろうか。もしかしたら、この部屋が崩れるかもしない……いや、そんなトラップ

なら壺が壊れてしまう。考えた末、決心した。もう考へは変えない。そんなものはないだろう。あつさりした答えであつたが、そう自分で言い聞かせた。目をつぶり、思い切つて壺を持ち上げる。……何も起こらない。逝つてはいないことに安心の笑みが浮かぶ上がつた。後ろを振り向き、帰ろうとした。その時、大地の心臓は一瞬静止しかける。

人の気配がする。

大地は人の気配を察知した。階段を下りてきているのだ。微かな足音と自分の直感がそう言つている。まさか、背後から後を追つてきたものがいたのか。誰であろうと、このことだけは知られたくはなかつた。心を引き締めた。大地は壺を大理石の台の後ろへ下賜し、再度、心の準備をする。確實におりてきている。1歩ずつ……1歩ずつ……。その足音はだんだん大きさを増し、近づいてきていることを大地に伝え、周りからの圧縮感をより一層高める。

相手が来たのと同時のタイミングに大地の背筋に今まで感じたこともない寒気が走る。階段を下りてきたもの。それはまさに化け物そのものだった。禍々しい仮面をかぶり、漆黒のマントに身を包んだ容姿。奴は「漆黒の者」と例えられるだろう。

思つた時には、大地は驚きで腰が抜けているのに気づく。こんな恐怖感は感じたことがなかつた。漆黒の者が近づいてくる。恐怖で動かない体を必死に動こうとする大地の目の前に漆黒の者はきた。揺ら揺ら揺れるその身体とそのてっぺんに着く仮面の顔をひねらせ、大地の表情を窺う。その姿はまるで魔物のように。大地の頭の中では、やはり目の前の奴が人間だと認識がしきれなくなり、大地の顔の横に首を持つて区たことには、恐怖感も限界に達し、周りからの圧縮感も唯ならなかつた。『来るな!』そう言つたがつたが、やはり恐怖で体が動かない。そんな自分に腹が立つ大地に漆黒の者はあり言葉を残した。

「魔王が復活した。お前だけが頼りだ……」

ドキッとした。大地が初めて漆黒の者が言葉を発することに気付

いたその声は、よくそこら辺にいる中年のおじさんの低い声に近い。大地の頭の中に謎が渦巻く。漆黒の者が言つたことは一切理解できなかつた。

（え？ 魔王？ お前だけが頼り？ つて言つよりも此奴が魔王なんじやないの？）

頭はよく動くのに、それに対して体は動かない。周りの圧縮感から解き放たれた時には漆黒の者は姿を消していたが、大地には、奴がここへ何をしに来たのか全く分からなかつた。

（魔王が復活したことを告げに来たのか？ でも、何故、僕に？）見た目は恐ろしいにも拘らず、あまり悪者の気配が感じられなかつた。一体、何者なのだろう？ 更なる謎が深まるばかりだつた。大地のとつて何もされなかつたことが一番良いことであつたし、壺のことに一切触れていないことも第一に考えた。

動けるようになるのにそれほど時間はかからなかつた。日々深呼吸した大地は文句を言つよう咳く。

「彼奴、何だつたんだろう？ つたぐ、魔王なんかが復活してる訳ねえじやんか」

壺を持つて出る大地に安心感が生まれ、再び笑みを浮かべた。外は中に比べてとても眩しい。日光が大地の目に一斉に入つてくる。その光は本当に眩しく感じた。大地はあまりの眩しさに目をつぶつた。咄嗟に目に触れた右手を額から離すと、残像が浮かび上がり、少し面白い。

「それで、この壺どうしよ？……」

あれだけの短時間でも、さすがに大地に疲れがあつたようで近くの石の腰を下ろす。周りは人の気配を一切感じさせず、森の木々のサラサラとした自然感漂う音だけが聞こえる中でのしばらくの沈黙

大地はしばらく考えた。

「よし、売ろう！」

そう言い、大地は歩き出し、いつものように森を抜ける。森の中よりさらに光り輝く村の光。そこにをそれが見える はずだつた。

そこで、大地は驚くべきものを田の当たりにしてしまった。

第2章 宝発見。そして……（後書き）

ネタばらし
・特に無い

村はまるで廃墟。荒れ果て、見るも無残な姿と化していた。何者かに襲撃された形跡があちらこちらに見える。村人たちは村の中心に集められ、誰かの話を聞いているように見える。

大地はその誰かをじっと見た。魔物だ。背筋が凍りつく。今日は幾度となくこんな状況に立たさせるのだろう、と胸のざわめきが治まらない。聖樹の方を見るが、何の異変も感じられず、常に天へとまっすぐ突っ立っている。今、何が起きているのか分からないうが、この胸のざわめきは本物だ。この鋭いらし直感がそう言っているのだから。まず、取った行動として魔物たちに見つからないように隠れることだ。ちょうどすぐ近くには自分の身体がすっぽり隠れることができそうな叢がある。大地はその長い草を掃い退けながら、中に入るも、グッと2本の長く伸びる2本の夏草をつかみ、うつぶせに寝転んだ。この草むらの中を抜けていくささやかな風を感じることも、胸のざわめきに失せられ、大地は遠方からやつてくる2つの陰を見つめた。

魔物だ。そう思った時には、もう目の前に来ていることに気付く。なかなか重たそうな体を引きずりながら歩く2人の魔物の動きは想像以上に鈍く、ようやく目の前に来たのだ。さつき隠れるときから自分の存在を知られていたとしたら、恐くてしようがなかつた。このまま通り過ぎていくことを希つていた。この時、願つてばかりでは、現実はついて来ないことを思い知らされた。

2人の魔物は立ち止まつた。緊張感は高まるばかりであつた。草は揺らぎ、2人の魔物に気付かれそうになるが、鈍感な奴らはそれを気にせず、ずっと立ち尽くしていた。2人の魔物の目線が気に入り、もう少し奥に隠れよう、と思い、後ろへ下がろうとするが、こそこは思考だけに抑えて置いた。前後左右草しかないこの場所でいざ逃げようと思つたら逃げ場も必死となるだろう。とりあえず、そつ

と近くの草を1本抜き取り、逃げ場を作るという無駄にも思える行為をとつた。そんな中、2人の魔物は会話を始めていた。

「聖樹と聞いて心配したが、そう大したことはなかつたな」

「ああ、魔王様が下さつた力は本当にすごい」

2人の魔物は笑い出す。この会話を聞いて大地は改めて、と言つか初めて実感した。

（本当に魔王は復活したんだ）

魔王が復活して、もうすでに支配までもが始まつてゐるなんて思うと、頭の中には「恐」「怖」の2文字しか浮かんでこなかつた。体も反応して震えが始まつてゐる。

（こんなことが起きるなんて……）

遙か遠く、村の中心よりさらに遠くから魔物の声が聞こえてきた。「あなたたち。そんなところでのんびりしてゐる暇があるのなら、もつと魔王様のために働きなさい」

いかにも誠実感漂う堅実な話し方だ。元の声に気付いた2人の魔物は声の元へまた、鈍い足取りで戻つて言つた。大地も、2人の魔物が行つてしまつたことにホツと心を落ち着け、強く握つた両手からも力が抜けた。邪魔になつていた長い草をかき分け、前進すると、村の中心を見た。

『ゲソール様！』

さつきそう言つて向かつていく2人の魔物を大地は見ていた。中心にその名の者がいるのは分かつていて、道化師のような姿に、鳥頭を模つた杖を右手に、如何にも魔王の手下 幹部のような存在感を出している。自分の存在に気付かれていないことは安心したが、まだ油断はできなかつた。

遠方からまたゲソールの声が聞こえる。少々しか聞き取れないその声を大地は耳を澄ませて聞いた。

「あなたたちはこれから魔王様の奴隸として一生働いてもらいます」
村人たちは皆、嘆き悲しんでゐる。親友である大洋も。自然と大地の儀手にはギュッと握りこぶしが作られ、唇もかみしめる。涙が

出てきそうでたまらなかつた。飛び出していきたかつた。弱い魔物としかたたかつたことのない自分にとつて、あいつらは驚異の他に何と言えるだろう。勝てる自信もなく、ただ捕らえられるのを見ているだけの自分の弱さと、どうしようもない現実が本当に悔しかつた。

「ゲソールの話が終わると、ある魔物からこんな発言が飛んできた。
「ゲソール様。あの森の中にも誰かいるかもしません。焼き払つてしまいましょうか？」

ゲソールは小さく頷いた。

「そうですね。焼き払いましょうか。どうせ、ここにいる奴隸たちもいはずれ、役目を終えれば魔王様によつて死を齎される運命。他の者はここで……」

そう言つて森の方へ歩いてくるゲソールを見て大地はハッとした。これは本当にヤバいことではないだろうか。予想では今隠れている草むらは森の真ん中に位置していはるはず。もしも、森が焼かれるようになれば、自分の存在がばれてしまつ。万が一、死を齎される可能性もなくはない。

大地はすぐに行動に移つた。今は周りに魔物はいない様子。ゲソールが来るまでなら時間はある。大地は草むらから気づかれぬように慎重に出た。

そこからは唯單ただたんに走つていた。自分はこんなに足が速かつたのか、と思えるような速さで。大地はとにかく自分の家を目指して走り続けた。

ゲソールは何も言わず、静かに構えた。村人たちの嘆きの悲鳴に對して、手下たちからは歓声が沸きあがつた。

「お黙りなさい！」

とても鋭い目つきで手下や村人たちを睨み付けた。鳥肌の立つような凍つつく眼差しに皆が硬直し、手下たちの歓声も瞬息のうちに無になつた。辺りが静まり返り、緊張感が張り詰める中、ゲソール

はもう一度構えた。村人たちは魔王の力の恐ろしさに怯えながら、息をのんだ。

「リューギア！」

ゲソールの手のひらから激しく、黒く眩いばかりの閃光が放たれたかと思うと、いきなり火炎放射器のように炎が噴き出してきた。その炎に焼かれ、森はあつという間に焼け爛れていく。

大地は走り続ける。後方から恐ろしい勢いで爆風とともに炎が迫つてきているというのに、それに気を向けながらも走る。もう、火が回ってきた。そう思うばかりに体が焼けるように熱くなる。熱風が肌を焼くように吹き当たつているのにも、今気づいた。広大な森を駆け抜けている大地の体力もそろそろ限界値だった。それでも、負けるわけにはいかなかつた。追いつかれない、と歯を食いしばりながら走り、走り続ける。炎も勢いが衰えることもなく、追いかけてくる。

もうすぐ、森を抜けると思ったその時

大地は大木につまずき、転んでしまった。すぐに立ち上がり、走り出そうとするも、体が言つことを聞かない。体力が限界に達してしまったのかと思つたが、目の前に広がる青紫色の霧を見てハッとした。

『邪樹』

この森を西に「聖樹」。東に『邪樹』と遂に立ち、普段は穏やかな樹だが、自らが危機に瀕すると猛毒の胞子をまき散らす。それが大地の目の前にそびえたつっていた。大地の体痙攣し、独の胞子を浴びてしまつたことを感じさせた。猛毒の胞子を浴びてしまつた大地の身体は自分で制御することはできず、何とか動いても、空を見上げる程度だった。背後から炎が迫つてきているというのに……。このまま力尽き、火葬させてしまうのか……。

空を見上げる大地に炎が降りかかり、暑く、苦しい。徐々に意識が薄していくのが分かつた。大地は死を覚悟した。

『立て！』

何処からともなく、声が響いてくる。その声を聞いた大地はふと立ち上がった。辺りを見渡しても誰もいない。少し不気味に思いながらも、冷静だった。足元の見た大地は自分に起きている奇跡に気付く。

立てている。

何故だろう？身体の痺れが和らいでいる。そんなことを考えながらも、炎はもう足元まで来ている。こんな奇跡はない、と感じ、走り出そうとする大地のズボンに炎が引火した。

「熱い！」

思わず暑さに悲鳴を上げ、走り出した大地は気づかぬうちに森を抜け、そのまま海に走りこんでいた。

海から出た大地はただ、焼け崩れて行く森をじっと見ていた。もうそこに今までの森の姿はなく、焼けた木だけが連なる平地にしか見えなかつた。巨大な煙の塊が空へと立ち昇つていく。今まで村人たちを支えていた森の最後。

「森、燃えちゃつた……でも、助かつた！」

大地は首をかしげると歩き出した。とりあえず、大きな岩の場所へ。

「でも、あの声は一体誰だつたんだろう？邪樹の毒も治っちゃつたし」

昨日から今日にかけて連續で不思議なことが起きているような気がする。不思議な鳥 漆黒の者 魔物の襲撃 謎の声。これら全て魔王復活につながっているのだろうか。そんなことを頭に残し、耳に魔物たちの足音が聞こえたので、すぐに向かい合つている岩の反対側に身を隠し、魔物たちの様子を窺うこととした。どうやら、魔物たちは残つた村人たちを探しているようだ。唯一の生き残りとして大地は絶対に無駄死にはしたくなかった。

『おい。誰かいたか？』

『いや。こっちにはいない』

魔物たちが話し合っている。

自分の家が見つかったことに少し戸惑つたが、家に自分がいるはずもなく、そんなこと考える必要はなかつた。家は燃え尽き、全壊していた。魔物たちは家の外面を見ただけで、誰もいない、と言うような表情を浮かべ、その場を去つていつた。全員帰つていくのを見届けた後も、しばらくあの焼け崩れた森を見ていた。いっぱいに息を吸い込む、大きく深呼吸する。

「疲れた……」そう言うと、大地は肩の荷を下ろした。

岩に背中をつき、もたれかかる。岩の硬さと冷たさが背中に伝わり、若干痛いながらも、心地良い感覚。目をつぶり、休息に入った。いつもより大いなる風が吹き抜けていくのを感じて、大地は深い眠りについた。

荒々しい波の音で大地はハツと目を覚ました。

「はつ、寝ちゃつてた」

さつきよりも波が荒くなつたように感じる。これも魔王復活の影響なのだろうか？と自分の空想を膨らませる。大地にとつて、あの出来事など夢ように思える物に過ぎなかつたが、岩の隙間から見える荒れ果てた森の後継を見ると、どうしてもそつは思えなかつた。大地は静かに立ち上がつた。少しふらふらして、左右によろけた。まだ、疲れが残つているようだ。村も家も全てを失い、大地の行く先はどこもなかつた。村人たち、大洋も奴隸にされてしまった。自分にはどうすることもできず、このまま見過ごすというのか。それが本当に悔しかつた。

もう一度岩にもたれかかつた大地の頭にある言葉よみがえつてきた。

『お前だけが頼りだ』

漆黒の言葉だ。この言葉の意味は今になつてもどうしても理解できなかつた。自分が頼りだというのはどういうことなのだろう。自分に世界が救えるとでも。それを思った瞬間、大地に「クスッ」と笑みがこぼれた。もしかしたら、漆黒の者は予言者なのかもしれない

い。何故か急にやる氣が出てきた。

「よし。やれる。やつてやる……？」

言いかけた言葉が止んだ。やはり、やる氣とは裏腹に不安もあるのだ。

「でも、本当にできる……？」

大地はその場に佇んだ。やっぱりやる氣と勇気が出でこない。やっぱり、あんな森を焼き尽くす奴らとなんか戦えない。

「大地……」

心臓が飛び出しそうなほど驚き慌てたが、落ち着いて振り返ると、そこには親友である大洋が立っていた。

大地より1回りぐらい小さい大洋を大地は上から見下げた。

「た、大洋。捕まつてなかつたのか？」

「魔物たちのすきを見て逃げてきたんだよ。他の人には悪いけど」可愛らしい声で大洋は言った。

大地は恥ずかしくて顔を下げた。

「大地強いんだろ。大丈夫だつて」

そう、大洋に言われ、大地は顔を上げた。

「大地、もしかして不安なの？」

「い、いや。そんなことはないよ。僕にできなことなんてないからな！」

久しぶりに大洋に向かつて調子に乗つたことを語つたかもしだい。今まで大洋と遊んだ日々などを懐かしく思つ。大地は、大洋の次の言葉を待つた。

「大丈夫みたいだね……」

大洋の小さな拳がいきなり自分の背中に当たるのを感じた大地は、不思議な感覚に陥つた。・・・時空が歪んだ、と言うのが正しいだろう。周りがぐるぐる回り始め、どこかへワープしそうになる。体がちぎれそうだ、と大地は歯を食いしばり耐えた。

大地はハツと目を覚ました。周りを見渡しても大洋はどこにもい

ない。

「あれ？ 夢だつたのかな？ …… 大洋……」

空は青く澄み渡り、空虚と成している。こんな空模様は見たことがない。海の波の荒さも治まってきた。大地も生き生きとしている。こんな日に旅に出なくでどうする！

大地の目線は水平線の向こうにあつた。次の瞬間、大地は海が轟くような勢いで叫んだ。

「よし！ やつてやらあ！」

帶をギュッと締め、両手に拳を作り、大空を見上げた。大地の目からは迷いは消え去つていた。

大地は、1歩を踏みしめた。

大いなる世界へ そして、魔王討伐のために。

大地の旅が今、始まつた。

第3章 魔物の襲撃（後書き）

ネタばらし
・「リュー、ギア」——コーギニア島

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8035y/>

大地の不死鳥

2011年11月23日21時51分発行